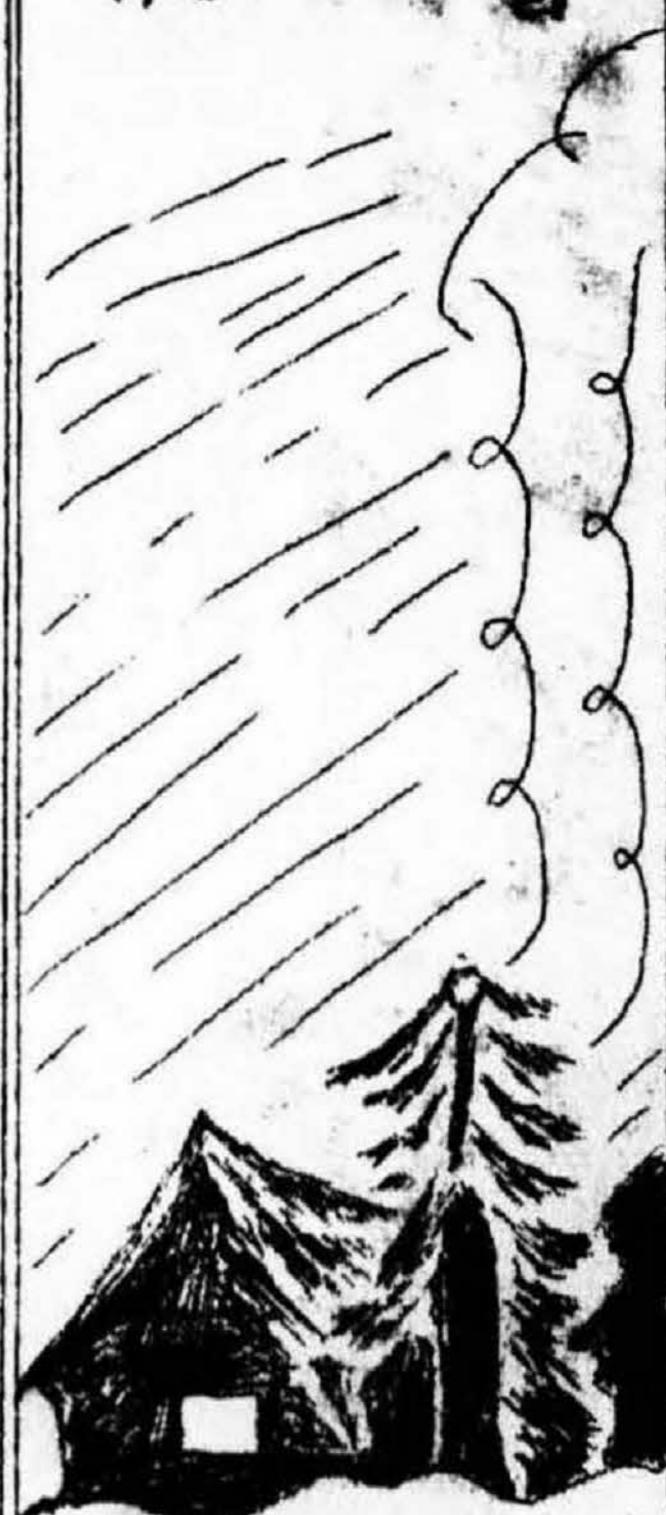


## 會報



第三年三号

昭和七年五月二十日發行

通巻十八号

の親切な態度だつた。朝の犬も一処になつて歓迎の意を表してくれた。何て気持ちの良い所なのだろう。旅をして今迄にこんな温かい気持で迎へられた事があつたべらうが。

美味い牛乳もたらふく熱めたし牛乳風呂にも入つた。エキゾティックな夕食を終れば昨夜未の寝不足な眼は早くもピントが外れて来る。

牧場から荒船へは初谷鉢泉を通らないで小屋場からの新道を従つた。此の道は荒船の大巖壁を間近に見ながら上れるのが何より良いと思ふ。小屋場から二丁程で内山峠道と分れるのだが其附近には私達の未だ日に埋めた計りだと云ふほどえらく大きな指導標が立てられてゐる。

これなら盲目でない限りどんな、あわて者でも見落す気遣いはない。道は荒船原の東北端に出る。従つて經塚山へ行くには原を縦断して行く事になり、反対荒船不動堂を経て来た場合には巖壁の端へとも岩(へとも岩)を見るには原を越渡するの勞を嫌はねばならない恨みがある。

私は經塚山の頂より「とも岩」附近の方が印象大深い。それがあの物要い巖壁は確かに一見の価値があると思ふ。

神津牧場と荒船山  
整井次へ下車した時はどんより曇つた空谷ひだつた。汽笛風も思ひなしか何となく兩気を含んでゐる様な気がする。同行の工も懲り方らぬ百分の兩男だと云ふ。  
すつかり憂鬱になつちやつて、馬越ヶ原を黙々と歩いた。此辺一体はジルフリンクにするとかで美しい落葉松が娘々に切削されてゐた。上荒地の村外れの小川で朝食を食ふ。水は手も千切れ相手冷たい。八風への道にも落葉松が多い。その黄葉がたまらなく良い。霧の旅を案じて居た天氣も八風の頂上へ着く頃は完全に晴渡つて、理想的な秋晴れになつてゐた。八風からの眺望は述べる進も無い。確かに中部日本の代表的展望台と云へるであらう。

牧場へ着いて第一に嬉しかつたのは牧舎の人達

了つた。惜しい事をしたのだ。乍然線ヶ瀬をマ  
イナスしても此度の旅は終始気持の良いものだつ  
た。天候に恵まれた事が第一に大きな要素であつ  
たとしてもそれ以外自分の心を強く捕えたものが  
牧場の存在である事は否定出来ない。  
今度は春に熊さんと行く心算だ

(要)

## 筑波参り

いよ／＼今日は茨城縣出張の最後の日といふ訳  
でもなかつたけれど、いつも遠くからばかり敬意  
を表してゐたのを思ひ出のものとも社様と考へて  
S先生ぢやないが現代向きにスピーデ登山をやつ  
て来ました。東北本線の小山駅と常磐線の水戸と  
を結ぶ水戸線の下館といふ所へ山男にはさつぱり  
關係ないからバスで岩瀬町と土浦の間を走つて  
波町へ登る。小五月蠅い店の前を走り抜けて拜殿  
具合は何処にあるのも同じ極向である所を見ると  
設計上こういふ所を取らぬといけないのかも知れ  
ぬ。

終点は丁度男体と女体の鞍部にある。こゝから

男体までは十分もからぬ位だつた、眺望は流石  
大いへ、ハケ岳と富士がよく見えた。丁度一諸大  
なつた附近の営林署の奴らしいのがハケ岳を見て  
あのとがつたのが槍ヶ岳で右に覆んでゐるのが乗  
鞍岳ですよなんて説明してゐた、槍ヶ岳からも乗鞍  
からもまだ俺の所へ転居通知が来てゐないのでい  
つの間にあんな所へ引越したるか我点が何かなか  
つた。

北大加波山が低く連らなつてゐる。両側に所々  
白く見えるのは石材採取場だろう。神社でお守  
りしを五枚許り買つて女体へ移る。独逸から只で  
貰つた飛行船の家がはつきり霞ヶ浦の右手の平地  
にある。茶店によつて「何んとか餅」を食つてや  
る。おなさんが色々柳下寧に御説明をして呉れた。  
今お汽車が真壁の駅へお着きになる所で御座  
ますしには少しこつちもれててしまつた。

出船入船岩だと叫天原とか赤慶七夷の岩  
を通ると、つもうひでお山はおしまひです、寄つ  
ていらつしやいまし、召していらつやまし」とい  
ふので下を覗るとどうしてまだ／＼筑波町は遙か  
の彼方だ、そんなりそつぱちをいふ店なんかに誰  
か寄らしていただきものかとは云はなかつたがその  
まゝさつさと通り過ぎてしまふ。

町から直ぐ亦バスで下山、筑波駅前から石岡行のバスに乗りかへ今日の仕事をやりに山下お別れをした  
 冬の晴しくカチン／＼凍つた天気の日にこ  
 へ来て遠近の山々を見たらほど愉快ふ事だろう  
 と思ふ。東京からなら一日で充分日帰りが出来る。  
 帰りもゲートガルを利用してするならコンチヤんが廿五  
 築かない内に充分遠くの山々が観賞出来ると思ふ。  
 (熊)

## 雪は良かつたが

「あんな様大滑れるの。」「雪さえ良かつたら、  
 まあね。」怪しげな言ひ方ね。白銀の乱舞を  
 見乍らの会話から、自分で雪さえ良かつたら、  
 まあかなりなボーゲン位出来ると、そつこ太股  
 を握つて見た。  
 で、三月の連休は新奥スキーフィールドではあるが、  
 中部日本では唯一の山スキーフィールドであり、又その  
 雪質は北海道のそれ的だと言ふ宣傳を掲げた数  
 車)へ名古屋銀行の一友人と出掛けた。約二里  
 ニメ)の麓に着く。麓と言つても奥嶺沢の中で、

沢の左側に「白樺の家」が建つて居る。収容人員  
 一室八畳六人詣で三十六人。此のスキーフィールドではこ  
 れ以上はスキーヤー一日帰たるべしと言ふことにな  
 る。外には家屋なるものが決してない。  
 丸も熊さん、ベンチやんぶどなら別問題だが。  
 湯は鉱泉。窓から眺めは雪の中に立つてゐる以上、  
 太陽の位置の変化に依る雪面の反射、陰影は美し  
 からざる筈がない。山スキーフィールドと言つてゐるだけあ  
 つてゲレンデの形態は何処にも範見されない。白  
 樺と岩と恐ろしい急傾斜とが總べて、初心者だ  
 つたら必ず「ワシヤ帰へるです」と言ふだらう程、  
 吾輩の心臓も魅惑以上の刺戟を受けた。雪はこの  
 春ですから完全な粉雪でスロープが北面してゐる為め  
 に、その状態は信州辺のスキーフィールドのそれとは比較  
 外の優秀さだ。宿から四時間費せば、大なる魅力、  
 奥嶺の峻峰が数本の尾根と変化多しスロープを往復  
 の享樂に呈供して、降路もスキーヤーの自信の程  
 度に依つて、数種大運び得るのが、其の魅力価値  
 を大にしてゐる。このシーズンに雪の無かつた木  
 曽福島駅(鉄道省が立派な木テル「山の家」を建て  
 て藪原を度外視したのに傍観してゐる藪原の駅長さ  
 んから宣傳を依頼されたのは事実だが、確かに此  
 外だけは紹介しなければならない掘出物だ。  
 所々「雪さえ良かつたら、まあね」氏はあのシ

ユナイターのスプレーを胸に描いて、吹雪を衛して奥嶺の頂に立つたです。八十何七センチ程の積雪と横なぐりの眞白な圧迫に悪戦苦闘の連続だった。其の寒さは昂々然の激戦に於ける皇軍の感じたものを感じするには絶好だとばかり、変んな所で愛國心を振震して、左手の指は殆んど固くなつた。涙ぐましい状景だ。

間もなく雪が小降りになつて愈々滑降だ。『あんなのは神様だ。』『成ら雪が良くつてもこの深さぢや。』『歐洲の雪はどんなかな。』で湯気を挙げた雪蓮鷹は、まるで匪賊に捕へられて、蹴り廻はされた後年の疲労を持つて宿へ滑り込んだ。何時しか吹雪き出した粉雪に折角のスプロールは永遠に蔽ひ消され、この悲壯だった『白銀の乱舞』の主演者は磁泉の中で、銀盤と銀幕との上の曲線を混線させて、深い法悦の内にうだつて、ガブリと頭から御湯をかぶつて見た。

ある日の定條さん

あの事件のあつた直後の廿三日、それは私とて土曜日だったので麻雀の方へ招待を受けて本郷

の方へ行つて居ました。夕御飯の坂東風戯もいよいよ  
かゝつて来ました。出ると定條さんと後ヶが銀座  
の甚兵衛で待つて居られるから早く引上げる様に  
との事、親分の事ぢや麻雀所の脇でないので早  
速途中退却の無禮を謝して円タクに飛び乗り甚兵  
衛指して馳せ付けました。

二階に上ると数組の客と共に一方の隅に久しう  
りの定條さんと相変わらずの俊ケとが少し、気持  
ちになりかけたとい小様な顔をして杯を重ねてゐ  
る所でした。老公ではない老若。公へ血圧あの手を  
して百卅なり、但しコレラニ非ずにはほんとく  
暫く振りました。然し此の前總高に御伴した時と  
少しも変らぬ顔色と元気でした。私の連ればせの  
参加を非常に喜ばれて、「まあ一杯」とはじまり  
「滿洲にも次山人同が居るが銀でもない奴許りだ  
矢張り山に登つた奴ぢやなくては話にならぬ事  
白おかしく語らひました。定條さんは「今日はと  
ても愉快だ、こんな事は珍しい、さあ又から熊さ  
人の内へ行つてタカラう」と云ひ出し、そこは例  
の癖で沽きまと早速勘定を拂つて外に飛び出しま  
しました。近いんだから歩きませうといふと「嫌  
乗ろう」で円タク。内へ来ると突然の来訪でお袋

ので定條さんを置きつ放しにして二人に自動車で  
又内まで帰つて来ました。俊ケも遂に参りました。  
そして二人はそのまま一階に机を並べて寐てしま  
ひました。

私は今まであんな愉快な定條さんを見た事があ  
りませんでした。父親のキンタマレが出た時は  
定條さんの最も愉快な時であるといふ事をはじめ  
て知りました。一度針葉針葉樹会でも定條さんを  
呼んでそのキンタマを採聴しやうぢやありません  
か。

昭和六年度會計報告  
昨年六月近藤兄より会計を引継いで以  
月までの会計報告を大に掲げます。

昨年六月近藤兄より会計を引継いでから本年四  
月までの会計報告を尤に掲げます。

卷之二

會費（四五、七年分，一部ヲ含ム）  
雜收入（部屋代、其他殘金）  
計  
九五、〇〇〇〇

血圧一百の老若公の意氣や正に旺なりといふべ  
しでせう。お袋や家内に色々愛嬌を振り撒き、やら  
又立上りました。今度は故花井卓藏といつも行つ  
て居たといふ三十間塀の某料亭  
俊ケのあやしげなドレッソ、私の新輸入の磁器、土  
佐節等々いつまでたつても欲はつき相にも見えま

一番牛 K 私が参つてしまつて階下の一室に寝て  
しまひました。その内 K 傘ケも降りて来たので、  
親父はどうしたいしといふと、窓たよしとの事な

一橋山岳部歌音譜代	一一〇〇〇
通信費（ハガキ、封筒、会報送料）	七、九五
立替金（村尾氏算父香典立替）	三、〇〇
差引残金（現金保有）	一〇〇〇〇
未収入金	一、八、六七
昭和五年度会費未納一名	七、六三
昭和六年度会費未納八名	一、五、五〇
計	一〇、〇〇〇
拂金（全部手塚君へ渡す分）	二、四、〇〇〇
第三年第二号会報代	一、五、五〇
会報送料（自第二年七号～第三年第三号）二、四〇〇	一、五、五〇
原稿募集通信費（五四分）	七、九〇〇
計	四、〇〇〇
大体以上の通りであります。昭和五年度は会員数が少かつた為会計幹事近藤兄は甚だ苦しい立場にあつた事を御同情致しましたが昭和六年度は人の会員が増加致しましたので経費に於て甚だ節約する事を得ました。殊には本会の会計幹事は從来より会の企画、豫算其他一切總務の役を一人で引き受け立場にある様に見受けられます。無能の小生がよく此の役を果し得られる所ではあります。従つて毎月の例会及地方会員の上京に際しては衆会を行つた外一年間と言つて何も致しません。	一一〇〇〇

でした。地方会員諸兄には大分御無沙汰をして幹事に對して御不満の向もあらうかと考へられます。が連れ走せ乍ら紙上にてお説び致します。本年度は新卒業生も続々御入会の事と算じますので適當な後輩の方を得次第幹事を辞したい所存です。幸に会計も今後益々豊になる積りで居ります。又に就て会費を値下げするか、又は会に積立金を作ることか、五月の例會で大体諸兄の御意見をお聞きしたいと思ひます。

東京在京会員は年額三円であります。が昨年度在京会員の使途は例会費及如水会館給仕料、通信費の一部、合計約二十五円で、在京会員十五名から四十五円の入金がある筈で少し在京会員を取過する事あるかと思ひます。例会費の如き幹事の至らぶる為時々部屋代を不足致しますが、又は小生に於ても注意致しますが、出席會員におかれましても務めて毎回お拂ひ下さる様に願ひます。

最後に大坂在京会員諸兄の昭和六年度会費が未納になつて居ります。誌上にて失禮ですが此の際至急却送金の程お願ひ致します。

振替御利用の節は東京三五二六二番へ払込まれ度裏面に必ず金田一郎宛、針葉樹会何年度分会費と御姓名とを記載して下さる様に願ひます。

前号に新進大謙ると書きましたが四月例会に新

連の出席二人、圓山、小川両君共引受けず、専く  
取扱へず会計報告を載せました。

(金田一郎)

### 浅貝の宿

浅貝の本陣湯本氏の宅は、其呼名から想像され  
るやうに、往時三国街道を往来した大名の本陣と  
なつた家であらう。土間は広く、天井は二階のか  
と恩はれるほど高く、家の中央には檜の尺角の黒  
光りのしてゐる大黒柱が巍然と聳えてゐた。宏壯  
な、がつし、りとした建築には盛時の跡が残つて  
ゐて、其時代の匂を放つてゐるのではないかと思  
はれるやうだつた。床にかけられた軸、壁にかゝ  
てゐる横額、襖に書かれた文字、皆由緒ありげに  
見えるものがかりだつた。室の中央に設けられた  
炬燵を囲んで、越えてきた新雪と暴風の峠路を語  
りあつた。

風呂が沸いたからと告げられたのは全く意外だ  
つた。案内されて行つてみると北向の、破目板の  
窓から切るやうな寒風の吹きこんでくる、形ばかり  
の湯殿ではあつたが、一日の旅の疲を洗ひ流す  
には充分だつた。バチ／＼と燃えかかる薪の者をさ  
きながら狭い湯槽の中で凍えた手足をのばす心

持は何とも言へなかつた。

雪は夜に入つても尚降り続いた。やがてランプ  
が運ばれ、黒塗高脚の燈が運ばれた。東京から持  
つていつた櫛の燃焼も其食膳に上つた。夕餉が終  
ると睡魔は一時に襲つてきた。敷布団は、宏壯な家  
にも似ず、短く狭いまるで畳のやうな感じのする  
代物だつた。袖のない固い平布団を二枚重ねて着  
させてくれたが、肩のあたりが何とも云へず寒く、  
深くもぐれば足の先が敷布団の外に出るといふ情  
なさに、腰をくの字なりに曲げて寝なければなら  
なかつた。翌朝、布団の固さを語りあつた時、  
「昨夜はまるで洞穴へ寝ただつた」と云つた磯野の言葉に思はず感嘆の聲をあげたの  
であつた

二十一日の朝は朝に明けていつた。雪は總んだ。  
二居峠あたりは一斤か、ぬるまゝと思はれた。  
春季皇靈祭の朝立を茶飯で祝つてくれた里人の志  
は嬉しかつた。

午前七時、大余經くなつたりユツクを肩に、見  
送つて下さる人々に別をつげて、行手に残る  
微スモシユブルをより火打峠へと、新雪の中  
に踏み入れた。

(浩一郎)

## 塚田のこと

昨日夜行にて當地へ参りました。朝飯の後早速定塚さんと二で赤沼氏と共に、有明村の塚田の家及び墓へ参りました。彼塚田なき後の塚田家なるもの、殊に妻君は氣の毒に思ひました。まだ廿一の若さです。そして大人しさうな優し相な人に見えました。今日はとても當地は風がひどく雨々へ況り二千五百寒の山城、吹雪中で死んで行った彼の屋敷にふさわしい天気でした。山はあらしの雲に包まれて所々雪の襲をのせさせて居るのも凄惨な気分いやが上にも高めて居ました。一度美ヶ原へ登つて、三、四日内に帰京の予定です。其れで又、

吉沢一郎

淡路西石川にて

牛塚

兄

位牌に次の如く書かれありました。

遺音沈勇賢良忍清居士

△ 先月号と共に、今度も八頁を出すこととなりました。これは冬山及び山岳スキーK、會員諸君の活躍の結果です。中川先輩は本シースキン始

められたにも係らず、四回も一然も其れは山岳スキーを次行されるなど懦夫をして立たしむるものがあります。此から又、冬山と夏山との間の、晩春初夏の好シーズンを控へて益々本試験面に活躍されん事を希望します、次発行の第四号は

一、錦功期日 五月三十日

二、記文、雑文、

三、消息 (五月一日—三十一日)

△ 届先 (神田區連雀町十八番地、或は日本橋通一白木屋)

宇佐美敏夫 府下馬込町南千束五七、

中麻長太郎 山口縣彦島、彦島製練所

赤城鈴太郎 大阪市東成区東桃谷町一、五、八。

△ 光月号の針葉樹會と共にお送した「一橋山谷部に寄する」並びに「山贊賦」は作曲を上野成昇の新進音樂家石川雅先生にお頬みしましたが聴き入し、出来栄えの作品で非常なる好評を得ました。(印刷中、二、三、誤謬がありますが紙面の都合上、次号に正誤表を出します御諒承下さい)。

## 編輯後記